

ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書

京都大学文学研究科博士課程3年 横田悠矢

京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻（修士課程）の開設を記念する今回の派遣プログラムでは、ハイデルベルク大学トランスカルチュラル・スタディーズ・センターおよびストラスブール大学日本語学科を訪問し、両大学の修士課程・博士課程を中心とする学生とワークショップ、ディスカッションを行うとともに、現地での市内見学を通じて文化理解を深めることができた。

ハイデルベルク、ストラスブール両大学にて開催された、「アジアとヨーロッパにおける平和と紛争」を主題とするワークショップの発表内容は、日中韓共同編集歴史教科書の意義と課題、朝鮮半島におけるDMZ（非武装地帯）国際ドキュメンタリー映画祭とプロパガンダの関係、東アジア共同体の構想およびその困難、渡辺一夫を通して見たヒューマニズムと狂気、日本海軍の戦後における表象、1920年代から1945年の絵葉書にみる満州、移民集団により生じたドイツ社会の軋轢、シリア騒乱の背景と現状など、時局性を反映したテーマから各国の歴史的経緯を対象とするものまで多岐に渡った。またディスカッションも旺んに行われ、とりわけ西洋における共同歴史教科書作成事例と比較した場合の、日中韓共同編集歴史教科書のイニシアチブの問題や、東アジアの平和に対する北朝鮮の消極的態度、また個人の価値を前提とするヒューマニズムの、現代における有効性といった論点には強い関心を覚えた。

市内見学で訪れた場所のなかでは、ハイデルベルクのドイツシンティ・ロマ資料・文化センター（Dokumentations- und Kulturzentrum Deutscher Sinti und Roma）およびストラスブールの欧州評議会（Conseil de l'Europe）がとくに印象的だった。前者は、東欧・南欧をはじめヨーロッパに歴史的に根付いた少数民族シンティ・ロマの、ドイツ第三帝国での排除と権利剥奪から、ナチス占領下ヨーロッパにおける組織的大量虐殺に至るまでを包括的に取り上げている。政府、虐殺犯側からの視点と個人の日常生活とを往還する展示構成で、数世紀来、地域レベルでは共存状態にあった多数民族と少数民族が、ナチス政権以後分断される迫害の歴史が身に迫って感じられた。また後者は、1949年に設立された、平和の促進を目指して人権、民主主義、法の支配の分野で活動する国際機関で、今回の訪問では議場見学の後、欧州評議会の主要組織とその役割について詳しい説明を受けた。議員会議（Assemblée parlementaire）の構成や閣僚委員会（Comité des ministres）での意思決定、また欧州人権裁判所（Cour européenne des droits de l'homme）における審査といった基本的な内容に加えて、近年の懸案事項であるアルメニア、アゼルバイジャンの紛争問題や、主要な予算分担国であるロシアの拠出金一部停止に伴う財政難など、喫緊の課題とその対策の可能性について現場の声を聞くことができたのは、大きな成果である。

報告者は現在パリに留学中であるが、今回の派遣は専門分野以外の大学院生や研究者と意見交換を行い、またナショナリズムや紛争をはじめとする国際問題の複雑性を再認識する貴重な機会となった。今後多くの人文社会系の修士課程院生が、京都大学・ハイデルベルク大学間で開設されたジョイント・ディグリー制度を通じて、アジアとヨーロッパの架橋に貢献することに期待を寄せるものである。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 近藤悠人

①学習成果

今回の研修テーマである「ヨーロッパとアジアにおける紛争と平和」と関連して、平和構築のプロセスとしての東アジア共同体の形成の可能性について発表しました。欧州連合からの離脱運動が熾るなか、EU形成の経験と現実を踏まえた上での発表でした。それ故、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学の先生や学生方の関心も一際高く、発表後のディスカッションにおいて、実際にEU圏内に居住している彼らの積極的かつ率直な質問や意見を伺うことができました。他方で、英語のリスニング・スピーキング能力や、自分の意見を論理的に明確に主張する能力が不足していたため、意志疎通が上手くいかない場面も度々ありました。今後こうした能力の涵養を課題として改善に努めていきたいと思えます。

また今回の研修を通じて、前回参加したタイ研修の時よりも「国際理解」に対して一層深い洞察を得ることができました。今後も今回の様な機会を積極的に利用して、国際理解の深化に努めていきたいと考えています。

②海外での経験

初めての欧州訪問ということもあり、日本とは異なる日々には驚きの連続でした。独仏両国の代表的な都市の訪問を通して知と伝統を重視する欧州文化に直接触れ、心動かされることが度々でした。また発表テーマがEUと関連していたため、EU圏内独自の出来事に目を向ける機会も屡々ありました。特に、シェンゲン協定加盟国間のビザなし移動や周辺諸国からの多様な労働者の移入、同一通貨ユーロの利用といった、EU圏内のヒト・モノ・カネの移動の自由化に伴う現象には目を見開かされる思いでした。一方で、両国の街角では移民・難民問題の片鱗を感じる機会も多々ありました。振り返ると、欧州統合の理想と現実を肌で感じる毎日でした。

ハイデルベルク大学やストラスブール大学では、バックグラウンドの異なる学生や先生方と接する機会が多く、日本の大学以上に多様性に富んだ知的環境に魅力を抱きました。また両大学の学生の方々の学術レベルの高さや、将来に対する展望には唯々圧倒されるのみでした。彼らの能力や姿勢を見習い、将来に向けてより一層努め励む必要があるとも再認識されました。

③プログラム内容

ハイデルベルク市内の見学について述べたいと思えます。ハイデルベルク大学と周囲の市街地の見学を通じて、大学と周囲の市街が一個の有機体として長い歴史を紡ぎ続けてきたことを肌で感じました。特にネッカー川と並行して走る哲学の道やハイデルベルク城、旧市街中心部の聖霊教会から市内全景を望んだ際には、赤色の屋根で統一された建築物が整然と並ぶ、伝統と格式あるドイツの都市としての雰囲気を感じることができました。また Dokumentations- und Kulturzentrum Deutscher Sinti und Roma での学芸員の方の熱心な解説や、「踏きの石 Stolperstein」「焚書 Bücherverbrennung」記念プレートの設置、それらのプレートに関する見ず知らずのドイツ人の自発的な解説なども強く印象に残りました。輝かしい歴史のみならず、こうしたナチス時代の負の歴史も真摯に見つめ直し、後世に広く伝えていこうとする姿勢を垣間見ることができました。

加えて、日本語学科への訪問と先生方からのお話から、長年に渡って日本へ関心が強く持たれ続けてきたことも学びました。実際その後何った大学食堂において、日本語の学習ノートや単語集を開いて熱心に学ぶ学生の方々の姿が見られました。また彼らの中に、政治的関心から日本語を学ぶブルガリア人学生も含まれていたことに大変驚かされました。更に先述した記念館の学芸員の方からも、差別撤廃という点で共通点のある全国水平社との連携関係について詳しいお話を伺いました。一見日本から遠く離れている様に思われる欧州からも、多様な視点から日本へ関心の目が向けられていることを実感しました。他方で、京都大学欧州拠点の見学を通じて、ハイデルベルク大学との協力関係を基盤として、京都大学から欧州、特にドイツに強い関心を抱いている学生の派遣が盛んであることを伺いました。ハイデルベルク大学を中心とする欧州の諸大学との相互協力によって、京都大学の国際化が進み、欧州との相互理解・協力の深化もより一層進めば、と思われました。

④進路への影響

9日間という短い期間でしたが、ハイデルベルクとストラスブールという特徴ある都市と大学を訪問することができ、非常に刺激的な研修となりました。今回の貴重な経験を糧にして、今後の留学・進学・就職などについて総合的に考えていきたいと思っています。

今回の研修と一緒に参加して頂いた京都大学・ハイデルベルク大学・ストラスブール大学の先生方、学生の皆様を初めとして、今回の研修実施のためにご尽力頂いた全ての方々に深く感謝致します。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣報告書」

京都大学文学部 現代史学専修2回生 千種杏奈

今回の派遣プログラムでは「ヨーロッパとアジアにおける紛争と平和」というテーマのもと、ハイデルベルク大学とストラスブール大学において発表・意見交換、またそれぞれの地域の名所見学、欧州議会訪問を行いました。

私は主に、ハイデルベルク大学のワークショップについて報告したいと思います。

ワークショップはハイデルベルク大学の文化越境専攻の学生と京大の学生それぞれの発表、質疑応答、最後に参加者で議論を行うという形式で開催され、お茶やお菓子をご用意して頂いたなか、和やかな雰囲気で行われました。

ハイデルベルク大学の発表者の学生の方はみな修士課程に在籍されていることもあり、発表・質疑応答ともにハイレベルなものでした。ハイデルベルク大学の方は「The military tradition of the Japanese navy」「Cambodian Civil War」などといったテーマで発表され、東アジア地域に関する洞察の深さに衝撃を覚えました。私たちのグループは「The possibility of an East Asian Community in Comparison with the European Union」というテーマで発表を行い、構想段階にある東アジア共同体について、EUとの比較を行いながらどのような形で構築されていくべきかを考えました。とても熱心に聞いていただき質問も受けましたが、英語力の不足により不十分な回答しかできず、悔しい思いもしました。

発表後は今までの内容を踏まえた討論が行われました。活発な議論が起こり、私はなかなか英語が聞き取れず勉強不足を実感しました。議論では地域共同体が取り上げられ、経済的視点だけではなく政治的な視点も必要であること、また積極的な共同の平和構築の目的だけでなく大国の圧力から自国を守るための目的もあるのだということをおぼろげに学ぶことができました。さらにEUとは異なるASEANのような緩やかな繋がりというのも共同体の在り方としてのひとつだと分かりました。地域共同体の多様な在り方について考えを深められたのでとても興味深かったです。

また他の論点では、近年の特に先進国では、政治的にも経済的にも比較的安定しているため、労働条件などが少しずつ苦しくなっている、声をあげずに働き続けてしまうといった傾向が取り上げられました。日本の過労死問題ともつながる内容だと感じました。

平和とは何かを考えるのはとても難しく、紛争のない安定した状態が平和なのかということそれが答えでもないと思います。しかし今回のプログラムを通じて、他者を理解し、平和を模索していくプロセスこそ最も大切などではないかと考えました。

私が海外へ行くのは今回のプログラムが初めてで不安もありましたが、カム先生をはじめとする先生方、引率して下さった横田夫妻、橋本さん、ハイデルベルク大学のランランさんのサポートのおかげで大変有意義な時間を過ごすことができました。最後になりましたが、推薦書のご記入を頂いた永原先生、この研修を支えて下さった各大学の先生方、職員の皆様、すべての方々に深い感謝をお伝えしたいと思います。

ハイデルベルク・ストラスブール派遣報告書

京都大学文学部3年 國島知美

私たちは、ハイデルベルク大学とストラスブール大学で紛争と平和というテーマでワークショップをしました。ハイデルベルク大学では英語を共通語として使用しましたが、ストラスブールでは日本語が共通語でした。海外学生との交流する時は英語が多かったのでこういう場で日本語が使われているのは新鮮でした。

ワークショップ当日は、まずはじめに大学内の見学をしました。現地で留学をしている博士課程の先輩に案内していただき、学生寮などの各施設を見てまわりました。やはり京都大学とは趣が違い、現代的でデザインに趣向が凝らされている建物が多かったです。周辺の伝統的な街並みとのコントラストも面白いと思いました。

それからスーパーで各自昼食を買い、ストラスブール大学の学生の方々と合流しました。一緒に昼食をとりながら、日本のことなどを話しました。彼らが日本語を学び始めたきっかけも聞けて楽しかったです。自分の国について興味を持ってもらえるのは嬉しいと思いました。やはり印象としては、日本のポップカルチャーに興味がある学生が多かったです。

ワークショップでは、お互いにプレゼンテーションをしてディスカッションしました。日本学生側のテーマは教科書問題や非武装地帯についてなどで、ストラスブール大学側のテーマは慰安婦問題や北方領土などがありました。はじめ私は、海外の学生と紛争と平和というテーマでディスカッションをすることに不安を感じていました。国籍も背景も違う人が集まってこういったデリケートな話題を扱うのはとても慎重さが必要な作業だと思うからです。そこが、日本の学生同士のみでの議論と違うところだと思っていました。しかし実際にストラスブール大学の学生の発表を聞くなかで、やはり違う背景を持った人ならではの考え方が表れているのが聞けてとても良い機会になりました。同じような背景の人同士で話していても得られないことだったと思います。また、ワークショップに参加していらっしゃった先生方の意見も大変参考になり、自分の考えの甘さを知ると同時に自分なりに新しい視点があることを知れたので良かったです。

ストラスブールでのワークショップ全体を通して、向こうの大学での生活を垣間見れたことが良かったです。今まで、留学はどこか遠いものだと感じていましたが自分も今とは違った環境で勉強をしてみたいと思えましたし、それを現実的なものとして感じる事が出来ました。

ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書

京都大学文学部地理学専修三回生 大友葵

今回の研修では、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学の大学施設の見学、両大学の学生とのワークショップ、それぞれの街の見学が行われた。

ワークショップはハイデルベルク大学では英語で、ストラスブール大学では日本語で行われたが、ほとんどネイティブに近い英語を完璧に聞き取ることは難しく、議論の中で理解が追い付かず、自らの英語力の低さを目の当たりにした。ある文化を理解するには現地語を用いることが理想だと考えるが、その前段階のコミュニケーションの共通言語として英語の重要性を身をもって知ることが出来た。

ストラスブール大学でのワークショップの翌日には、ストラスブール大学日本語学科の学生と共にストラスブールに拠点を置く欧州議会を訪問した。欧州議会では、職員の方から直接お話を伺い、ホームページを読むだけでは知ることの出来ない貴重な内容を伺うことができた。

今回の研修の大意からは逸れてしまうが、今回訪れたストラスブールとハイデルベルク両地域の交通事情が興味深かった。両地域とも歩行者用通路、自転車用通路の区別が明確にされ、かつそれが順守されていたことが印象的であった。日本でも自転車用通路は存在するが、まばらであり、歩行者も自転車もその標識をほとんど意識せずに通行している。また、ストラスブールは路面電車（トラム）が主要な交通機関となっており、さらに、郊外に駐車しトラムで街中に入るパークアンドライド方式も導入されている。そのおかげで街中に車が渋滞する様子は見られなかった。

文化というと、宗教といった精神的な要因が第一に浮かぶが、上記の様な交通事情も人々の生活様式を変えるとすれば文化の担い手といえると考えた。

また、ハイデルベルクとストラスブールではホテルの設備に大きく違いがあった。ハイデルベルクでは日本のビジネスホテルと似たような設備とアメニティであったが、ストラスブールではフランスの本質主義を反映しているのか、シャワー室は畳半分もなく、エレベーターも非常に狭かった。ドイツと国境を接する地域でも様式の違いは明らかであり、国境が意識された。

一口に文化といっても、どの観点から見るか、どの範囲で捉えるかによって文化のくくりは変化するのだと改めて実感した。それと同時に、文化越境という言葉も人によって様々であろうと再認識できた。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 手代木さづき

以下に、ハイデルベルク・ストラスブールでの「食」に関する三つのエピソードから、今回の派遣の重要なキーワードであった transculturality について学んだことを報告する。

ハイデルベルク初日の夕食の席で、「ギョーザの transculturality」が話題に上った。ちょうどその日の午前中、Heidelberg Centre for Transcultural Studies (HCTS) で、Oliver Lamers 研究管理長からピザを例に Transcultural Studies について伺ったところだった。ギョーザと言えば中華料理を想像しがちだが、小麦粉の皮でひき肉や野菜を包んで焼いたドイツ料理、マウルタッシェンをはじめ、似た食べ物は世界中にあるらしい。このことは、ヨーロッパにもギョーザがあるとは想像だにしていなかった私にとって驚きだった。しかし、それと同時に、世界中の似た料理をひとくくりに「ギョーザ」とまとめてしまう言い方は、とても東アジア的な表現であると感じた。マウルタッシェンの起源として、宗教的理由で肉を食べてはならない修道士が、どうしても肉を食べたくて、神の目を欺くために小麦粉の皮に包んで食べたという説があるそうだ。ギョーザ的な食べ物がどこで生まれ、どのように伝播したのか、或いは偶然形が似ているだけなのかは分からないが、もしそれが中国以外で発明され、中国へ伝わったものだったとしたら、それこそ transcultural な逆転の発想で面白そうだ。Transcultural studies と、関連する複数の文化をその内の一つの文化で代表させる見方は、分けて考えなければならぬと思った。

二つ目のエピソードは、ホテルで朝食をとりながらカム先生から聞いた話である。移民や難民の多いドイツで、排外主義者が、ナショナリズムを高揚させるために「ドイツ」の飲み物であるコーヒーを積極的に飲もうというキャンペーンが起こしたことがあるそうだ。確かに、コーヒーはドイツ人が好む飲み物ではある。しかし、原産地はアフリカであることを、その排外主義者は忘れていた。また、ドイツの食卓に欠かせないジャガイモも、元はと言えば大航海時代に南米からもたらされた食材だ。異文化圏由来のものが日常と密接な関係を持つことでその transcultural 性が見えにくくなり、ついには自文化アイデンティティの中核にもなりえるというダイナミズムを垣間見た、学問的な朝食の時間であった。

最後のエピソードは、ストラスブールの伝統料理についてである。ストラスブールのレストランは、シュークルート（塩漬けのキャベツを豚肉と煮込み、ジャガイモやソーセージと盛りつけた料理）やベッコフ（肉じゃがのような鍋料理）といった、ドイツ色の濃厚なアルザス料理を前面に押し出している印象があった。また、土産物店には、伝統衣装の子供たちとアルザス料理がともに描かれたポストカードや、地元の焼き菓子クグロフを焼くための陶器の型が多く並んでいた。このようなことから、ストラスブールでは、伝統料理が、アルザス独特のアイデンティティを示す重要なシンボルとして掲げられていると感じた。「食」の観光資源としての活用は、例えば大阪のたこ焼き・お好み焼きや仙台のずんだシェイク等、日本でも頻繁に行われている。しかし、第二次世界大戦後に至るまで独仏の複雑な紛争の舞台となり、今はフランス領であるアルザスが、ドイツ色の強い伝統料理を自身のイメージとして掲げることは、単なる観光戦略ではなく、他のフランス都市やドイツ都市とは異なる、transcultural かつ trans-border な独自のアイデンティティを示しているように感じた。

以上のようなエピソードを通して、身の回りにあふれる「食」に関する transculturality に気づくことができた。しかし、日常生活の中で、私たちは、transculturality よりも、自身に固有の“culture”という幻想に固執しがちであるように思う。二つ目のエピソードで述べたような、極右思想者・排外主義者による国家或いは民族の「伝統文化」の過度な強調は、最も顕著な例であると思う。派遣研修の事前資料で Michaels (2012) が述べているように、すべての文化は混合物であり、純粹に一國に固有な文化などない。それにもかかわらず、自国の、或いは自民族の「文化」はナショナリズムの高揚にしばしば利用され、私たちは無意識にそれを自らの誇りとして受容していないだろうか。また、transculturality を忘却或いは無視の例は、私自身の日々の大学生活の中にも見出せる。私は東洋史を学んでいるが、一つの地域、一つの時代に集中することで他の地域・時代の歴史や他の学問分野をシャットアウトしてしまう危険をしばしば感じる。今回の派遣研修を通じて、transcultural な視点は以上のような現状の打開策になるものだと感じた。Transcultural という概念によって、文化相対主義的視点から「自文化の優越」といった言説に異議を唱えることや、一つの地域・時代に焦点を当てた自身の研究を他の地域・時代との関連の中で発展させることが可能になる。「食」という、それぞれの土地ならではの文化体験を入口として、普段は見失いがちな transcultural な視点の重要性について考えることができたことは、今回の派遣研修の意義の一つだったと思う。学部最後の年となるこの一年は、専門分野を深めつつ、文化を超えた視点も忘れずに、この派遣研修で踏み出した transcultural な人材としての一步をさらに進めていきたいと思う。

最後に、ハイデルベルク・ストラスブール派遣という素晴らしい機会を与えてくださった京都大学文学部、様々な「学び」を与えてくださった、カム先生、西田さんに大変感謝しています。

ハイデルベルク・ストラスブール派遣報告書

文学部二十世紀学専修 濱 希望

本プログラムでは「戦争と平和」というテーマに則し自分たちで設定した課題についてプレゼンテーションを作成し、ドイツのハイデルベルク大学・フランスのストラスブール大学の学生とワークショップを行うことが主な目的となっていました。もちろん、歴史あるハイデルベルクやストラスブールの街を見学することをとても楽しみにもしていました。ワークショップはそれぞれの街に着いて2日目に行われましたが、1日目の見学では常に発表のことが頭の隅にありました。私は2つのワークショップのうちハイデルベルク大学で行われたものについて述べたいと思います。

ストラスブール大学での発表は交流する学生たちが日本語学科の方だったので日本語で行われましたが、ハイデルベルク大学での発表は英語で行われました。発表のために2人組を組んだ私たちは「戦争と平和」についての資料を集め、読むことについてはもう少し前から行っていました。実際にプレゼンテーションを作成し始めたのは渡航の約1週間前でした。「戦争と平和」という広義で深刻なテーマについて、しかも英語で発表するということが私たちはとても緊張していました。テストやレポートの合間に2人で連絡を取り合い、なんとかプレゼンテーションを作り上げカム先生に添削していただきました。ハイデルベルクに着いてからも前日のホテルで台本を読みあわせて時間を計ったり慌ただしく当日を迎えました。

ハイデルベルクは大学を中心として栄えた大学街で街の至る所に大学の建物があります。ホテルから歩いて10分ほどの建物にある教室でワークショップは行われました。教室にはハイデルベルク大学の文化越境専攻の学生が20人ほどいて、先生はハイデルベルク大学の先生とカム先生の2人でした。発表は私たち京都大学生のものと文化越境専攻の学生のものとの交互に行われました。発表のテーマには「朝鮮軍事境界線での映画祭」「東アジア共同体の可能性」「渡辺一夫、ポール・ヴァレリー、トマス・マン」「東アジア共通教科書作成の可能性」「絵葉書に描かれた満州民族の表象」「日本海軍の伝統」「カンボジアのポル・ポト政権」などがありました。私たちの発表それ自体はそれぞれ台本を考えて練習してきていたので上手くいったと思います。しかし、ハイデルベルク大学の学生たちは発表のあとの質問や自分がその発表をみてどう思ったのかを大事にし発言していました。そのため発表のあとのディスカッションが盛んで私たち日本人学生は多少萎縮してしまったようなところがありました。

今回のワークショップでは自分の英語力と発言する度胸の必要性を感じました。ハイデルベルク大学生の発表で使われた英語は速く、発表について聞き取れない箇所が何箇所もあり、またディスカッションについても同じ理由でついて行けていないと感じることがありました。自分が今まで聞き取れていた英語は相手が合わせてくれていた英語なのだなということを実感し、留学生はこのような厳しい環境で学習しているのだなと思いました。また自分の思うことがあっても英語力に対する気後れだったり内容に対する不安があり発言できないといったことがありました。後で考えてみてこのような場で必要なのはとりあえず恐れずに自分の意見を言うことだと気付きました。

外国の大学でのワークショップの経験、初めてのヨーロッパの街並みの見学など自分にとって新しいこと刺激的なことがたくさんあったプログラムでした。私たちにこのような機会を与えてくださったみなさんに感謝申し上げます。

ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書

文学部3回生社会学専修 許 蔚欣

ストラスブール大学の学生とのワークショップに重点を置いて報告する。

ワークショップはストラスブール大学の日本語学科の学生との共同発表であり、ストラスブール大学の参加者は主に修士の一年生と二年生であった。学生たちは紛争と平和をめぐってそれぞれ関心を持つテーマについて発表する。ワークショップの全体的な流れとして、両大学の学生の発表テーマによって4つのセクションに分けられ行われ、発表ごとに質疑応答の時間が設けられ、最後にすべての発表が終わった後、すべての発表を振り返る議論が行われた。

最初のセクションにヨーロッパ圏における紛争に関する発表が行われた。最初の発表はストラスブール大の学生の発表で、ヨーロッパ圏における移民集団と社会の対立に関する発表であった。発表者は三つの側面から移民に対する不平等扱いを論じ：多文化政策における不平等、分離政策における不平等とどうか主義における不平等について論じていた。発表後の議論もとても活発で、ヨーロッパ諸国の中でも国によって移民政策が異なることがわかった。例えば、ドイツでは「移民」というカテゴリーがなく「難民」しかないため、「移民政策」がないという例が挙げられた。また、二つ目の発表は京大生の発表で、EUを参考しアジア圏で連合を組むことに関する考察であった。

セクション2はシリア騒乱と北方領土の領土問題に関する発表で、両方もストラスブール大の学生の発表であった。また、セクション3では主に我々京大生の発表であり、DMZ映棚画祭と情報戦争に関する発表と平和と狂気についての発表であった。私の班はDMZ(非武装地帯)を発表し、そして北朝鮮とアメリカの情報戦争について議論してみた。発表後、ストラスブール大の学生から面白いコメントをいただき、先生方からも情報戦争において新たな考え方についてコメントしていただいた。情報戦争において、情報の検証や情報の流通と情報発信側の目的などに気を配らなければならないことを知り、大変勉強になった。

セクション4は主に歴史問題に関する発表が行われた。京大生代表は「日本と韓国の歴史教科書から見る歴史認識問題」について発表し、ストラスブール大の学生はインタビュー調査でまとめたドキュメンタリーを通じて慰安婦について発表した。

今回のワークショップではドキュメンタリー映画を扱う発表が二つあり、紛争と平和というテーマにおいて映画やドキュメンタリーが果たしている役割を実感した。最後に全体的に議論が盛り上がり、予定より時間が長引いてしまった。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部3回 米倉美咲

息を呑んだ。見上げるほどの天井にはあらゆる雑音が吸い込まれ、その漠たる空間にはステンドグラスの光が四方から落とされる。この重厚さ、この荘厳さは何に依るのだろうか。石材の重みか、歴史の重みか、信仰の重みか……。いくつもの問いと可能性が脳裏を掠めていく中、私は聖堂の奥、数段高くなったところに祭壇を見とめた。その時不意に、神は存在すると思った。そして、切実に救済を願いたくなった。

これが「ヨーロッパ」か、と思った。勿論、これが「ヨーロッパ」の全てではない。だが、この空間に長く身を置く人々と自分との間に、埋めようのない差異があることは痛いほど分かった。何を今更、と言われるかもしれない。「ヨーロッパ」と「アジア」、そして「日本」との間に大きな違いが存在するのは当然で、驚くことなど何も無い、と。確かに、言葉も気候も食べ物も、「何もかも」が違った。言葉を交わした学生たちは、私の全く知らない国で育ち、全く異なる問題意識を持っていた。首を傾げる場面も、徐に腑に落ちる事例も多々あった。だがそれらの差異は、言葉を尽くせば、論理的に捉えれば、理解し合える差異だった。理解したその先で、何かを語り得る差異だった。例え理解出来なかったとしても、それは議論をする時間の短さ故であり、私の語学力不足故だと言えた。でも、これは違う。どれほど努力したとしても、私にはきっと届かない世界なのだと悟った。

この衝撃に私が襲われたのはストラスブールのノートルダム大聖堂を見学した際のことであったが、宗教的「ヨーロッパ」世界に触れる機会は、このプログラムを通して何度もあった。例えば、ハイデルベルクでは、プロテスタントの教会を見学した（前述のノートルダム大聖堂はカトリックである）。質実剛健といった風の内装、小ぶりの十字架のみが捧げられた祭壇。内省的な空間のように映った。次に教会を出て商店街へ歩を向けると、一軒の店先の地面に、黄金の小さなプレートが数枚埋め込まれていた。目を凝らすと年号や名前、AUSCHWITZの文字が見える。慣れないドイツ語に苦戦している私に、通りすがりの人が一言、Jewishと教えてくれた。街が宗教の歴史を色濃く残す一方で、学生たちからは、「特別な行事の日には教会には行かないし、篤い信仰心がある訳でもない」という声を聞いた。

このような経験は枚挙に暇がないが、西洋史を学ぶ者としては、その一つ一つが「異国の過去」へと思いを馳せる糸口となり、それは必然的に「現在の私」へと帰ってきた。「ヨーロッパ」と自分、「アジア」と自分、「日本」、言語、宗教、学問と自分……。帰国した今でもこれらの問いは私の中で渦巻いている。答えは、おそらく、永遠に変化し続ける。日本で、そしてヨーロッパで、私が生活し、議論し、思考する限り。留学はその一つの間、その一つの間ではないかと思う。勿論、充実した学問環境や、それを支える資金的・人的援助、それを取り巻く人文学への寛容な空気、その中で呼吸しながら交わされる闊達な議論……。それらに学問の重みと煌めきを感じ、ある種の憧れを抱いたのも嘘ではない。だが、そう、もしかすると、この「憧れ」もまた一つの答えなのかもしれない。留学した私に尋ねてみたいものである。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部・社会学専修3年 (氏名) 山淵あいり

今回の派遣プログラムでは、ハイデルベルク大学とストラスブール大学での発表とディスカッション、諸機関訪問や観光地見学と、1週間という短い期間ではあったが非常に充実した時間を過ごすことができた。以下、ハイデルベルク市内見学とハイ大施設訪問について報告する。

ハイデルベルクは散策しているだけで、視覚的にも聴覚的にも気分を高揚させる刺激にあふれていた。レンガ造りの建築物、荘厳なプロテスタント教会、1年中クリスマスモードの雑貨屋さん。歩き慣れない石畳の道も、トラムが走る風景も印象的だった。市内のいたるところに大学施設が点在しているためか、アカデミックな「学生の町」という雰囲気がある。私たちはネッカー川にかかるカールテオドル橋を渡り、哲学の道を歩いた。ハイデルベルクの哲学の道は京都のそれとは違い、斜面が厳しく階段も多い。息が切れ、若干汗ばむほどで、ちょっとしたハイキングをしている気分だった。見晴らしの良いところに出ると、目前に広がるその景色は格別で、ゲートをはじめとする哲学者やヴェーバーやハーバーマスといった名だたる社会学者らもこの風景を眺めながら、上がった息を沈めつつ物を思ったのだろうか、と想像すると胸が高鳴った。京大からの派遣メンバーの一員として、先生や友人たちとこの景色を見ることができたことが嬉しく、光栄に思った。

ハイデルベルク城は標高の高いところに建っており、赤い壁がライトアップされている夜に見上げると、怖く感じさえるほど神秘的だった。翌日、私たちはケーブルカーでお城まで登った。ルネサンス期の壮大な建築物で、威厳ある格調高い雰囲気に包まれている城には、かつて住んでいた選帝侯や建築芸術をめぐるたくさんの逸話や神話があり、それらを引率の先生から聞きながら見学した。伝統あるハイデルベルク城は多くの戦争も経験しており、破壊されて城壁が崩れ落ちているところも少なくない。その爪痕から戦争の歴史を感じることができた。

市内見学において最も印象的だったもののひとつは、シンティ・ロマ博物館である。ナチス占領下のヨーロッパで、段階的な隔離・権利剥奪から組織的な大量虐殺といった、人道に反する差別の犠牲となったシンティ・ロマの歴史や当時の様子を示す写真や資料が展示してある。それまでヨーロッパの風景や食事に少々浮かれていた私たちは、この展示を通してドイツや周辺国の経験と記憶を改めて学び、それぞれが今回の研究のテーマでもある「戦争と平和」について再び考えた。ホロコーストについて、日本で学ぶのとドイツで学ぶのでは大きく違う。ハイデルベルク市内にも知識のある者たちが収容され、書籍が燃やされた広場があった。そのような場所を実際に訪れながら、当時について考える経験は得難いものであると思う。

ハイ大施設としては、大学図書館や学生牢の見学、京大ハイデルベルクオフィスの訪問をした。図書館はまるで遺跡や美術館かのような建築で、ここで学ぶハイ大の学生をうらやましく思った。学生牢も印象的だった。治外法権をもつ大学は、騒ぎを起こした学生を大学において裁判にかけ学生牢に入れていたというが、学生たちは投獄されることを誇りに思っており、ここに入ることはひとつの勲章だったというのは興味深い。

京大オフィスは学生牢の真下にあった。京大からの留学生への支援のほかにも、ハイ大の学生に京大を知ってもらうための活動も積極的に行っているようだ。オフィスの知名度も上がってきているというお話を伺った。ハイデルベルク大学で学ぶ機会を持つことができた際には、非常に心強いなという印象を受けた。

以上がハイデルベルク市内見学の概要と感想であるが、ここには書ききれないほどの経験ができた研修だった。研修を通じて得ることのできた人との出会いも、私にとっては大きな収穫だ。トランスカルチャーを学ぶ学生や日本語を専攻する学生、京大への留学を考えている学生やハイデルベルク大学で学ぶ京大生——。彼らから聞く話はどれも興味深く、研究に対するエネルギーを感じ、私のモチベーションも刺激されたように思う。1週間行動を共にした派遣メンバーにもたくさんのことを教わり、いろいろな場面で助けてもらった。今後も関係が続けばいいなと思える友人を得たことも大きな収穫だ。

最後に、この派遣プログラムに関わってくださった全ての方々に感謝したい。ありがとうございました。